

天台宗寺門派西墓点資料における訓読語の活動

—平安中期・平安後期資料の声点を中心に—

松本光隆

はじめに

平安鎌倉時代の漢籍訓点資料における訓読語の位相の問題の解明は、小林芳規博士の御高著「平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究」(昭和四十二年三月、東京大学出版会)によってなされた所が大きい。この研究書では、各博士家の訓読語の特徴が帰納され、記述されているが、現在も、漢文訓読語研究史上に大きな意味を持つものとして評価され、受け入れられている。この書では、各博士家間の訓読語の質の違いを解明する方法として、漢文の同文比較の方法が採られ、漢籍訓読語の分析においては、有効な方法として機能していると評価される。

ただ、漢籍の現存資料は、一等資料としては平安中期のものより伝えられているが、位相の問題で、比較の対象となる漢籍の資料は、十一世紀末・十二世紀以降に厚く遺存し、特に、鎌倉時代においての資料が主として取り上げられて比較対照されている。即ち、共時

的に比較の対象となりうる量が保証されるのは、各博士家において特定の漢籍の訓読語が固定し、家々で保守的に伝承されて以降のものが主であると判断せざるを得ない。同書には、平安初期・中期の漢籍訓読語に対する言及があるが、専ら通時的な観点による整理、論述で、共時的な視点から分析は、決して多くはない。これも資料の遺存の実態によるものであって、研究上の限界、制約があるのも事実である。

訓読語の位相解明に関して上げられた小林博士の成果は、各博士家の言語特性を明快に示す方法に支えられて、広く受け入れられているものである。これと同様の同文比較法を用いて、仏書の世界における漢文訓読語資料言語の位相的問題の解明に適用しようとする試みが重ねられてきた。築島裕博士による、成唯識論、大日経疏などの比較研究^①、三保忠夫氏による密教經典・蘊悉地羯羅經の共時的対照分析、月本雅幸氏による大唐西域記の比較研究などである。稿者も、密教の事相関係の方書的な性格を持つ儀軌類の同文的比較を

試みた事がある。⁽⁴⁾

稿者の比較では、漢文冒頭部分には、宗派流派の別（天台宗寺門派、山門派（山門派資料も、宝幢院点資料、仁都波迎点資料に互る）。真言宗広沢流、小野流と言う共時的な広がりで検討したものである）が特徴的に現れていると整理して示したが、検討対象資料の文章も進み、具体的に漢文の論述が展開されている部分における同文比較では、具体的言語表現の異同の出入りが様々で、十分に整理された帰納結果を得ることが出来ぬまま論述を終えたことがある。

各宗派流派の別は、教義内容、修法その他におけるの相承があつて、流派をなしたものであろうから、かかる宗教の学的伝承や、修法の相承と同様に、言語面でも流派別の訓読語が、特徴的な位相の問題として存したという、無自覚的な先入観が無かつたとは言えない。

月本雅幸氏は、右の御高論で、早くに、大唐西域記においては、宗派流派の訓読語面での相承、伝承が不明瞭で、明確な系統を認定することが出来ない可能性がある旨を示された。仏書における同文比較法が試みられて、研究が積み重ねられてきた現状において、仏教関係の書全てに互つての系統的伝承が、果たして存したのか否かの問題解明への発想法としては、月本雅幸氏のご指摘は、卓見であつたように評価できる。ただ、系統的伝承をどのようなレベルで論ずるかの問題、また、厳密には、共時的研究の時代的な違いと言

うことを念頭に置くべき必要があつて、時代時代による位相的状況が異なつていたと見る可能性は十分に残るものである。

天台宗寺門派の資料として知られるものに、第一群点に所属する西基点加點資料群が存する。この西基点資料群は、公共施設の図書館、私立の文庫を始め、その資料が伝わっているが、真言宗寺院にも、かなりの点数を伝えている。その代表が高山寺経藏で、天台宗寺門派を出でてより、高野山を経て、高山寺にもたらされたものが多いらしく、⁽⁵⁾比較的確まった量の加點資料を伝える。また、管見の及んだ範囲で、量的に多くを数えるのは、東寺観智院金剛藏伝存の資料群である。

これらの西基点資料群の中でも、本稿では、平安時代中期、平安時代後期の資料に焦点を当てて、諸資料間の言語状況を記述してみようと思う。以下に中心的に取り上げる言語事象は、声点についてである。天台宗寺門派の特徴的声点と言へば、濁声点「△」である。

「△」は、平安時代の寺門派資料に特徴的な符合であると考えられてきたもので、確かに、寺門派西基点資料に屢々見かけられるものである。声点の通時的研究は、これまでに行われてきたところであるが、⁽⁶⁾稿者は、時代的に、保守性、伝承性が強まったと考える院政期の西基点資料を対象に、西基点資料における「△」声点は、寺門派僧・慶祚個人に発したもので、寺門派も、本来、三井寺という一寺院に伝承が始まったものであると論じたことがある。⁽⁷⁾本稿では、天台宗も一流派の寺門派西基点資料に焦点を絞り、時代を平安

とあって、陀羅尼には、「○」と濁点「●」が現れる。但し、「百八名讚」の部分や、「啓請伽陀」等には、節博士が現れて、「百八名讚」では、

8、●●●_(下書)日_(上書)●●●囉_(上書)薩_(上書)但_(上書)●●●_(上書)囉_(上書)二合（永延元年点）

とあって、単点「●」と濁音には、双点「●●」が使用されている。

右の金剛界儀軌永延元年点に対応する奥書は、文慶が二十一歳の折、入道三宮悟円から皇蘭寺倫蒼の説の伝授を受けた事を記したもので、「前受」との注記のあるものであるが、「於天台山百光房奉受之」とあって、比叡山上の百光房での伝授であったことが知られる。

高山寺の経藏には、第一〇四函第二〇号として、頓證菩提即身成佛眞實三部一合行法最極印契眞言上卷一帖「資料3」が所蔵されている。奥書には、

（奥書）正暦二年（九九二）四月一日丹波國菜田郡／篠村郷定額寺

字河人字寫之／已畢

とあるもので、平安中期末の西墓点加点資料である。訓点は墨書によるもので、ヲコト点（西墓点）の加点箇所は、資料の一部に過ぎない。この資料には、「二ノ如來」、「傳受宗家 八道（に）別（れ）ケリ「矣」」、「其（の）趣區々（に）別レケリ」、「皆悉（く）滅亡シケリ」、「成信々々」等の注意を引く語彙が現れている資料であるが、文中に、

○教勅（に）隨（ひて）伯耆大山白山熊野長谷寺粉河生合竹生

嶋日光足持_{スリツニ}口淵石山中堂各（の）別（して）五度參詣（し）

已了（ぬ）

などとあって、天台宗寺門派修験道関係の資料であろうと推測されて、関心を引かれる資料である。この資料には、梵字による陀羅尼と漢文の本文が存するが、声点の加点は、見あたらない。

石山寺には、天永三年（一一一二）書写加点になる金剛頂蓮華部心念誦儀軌「資料4」が存する。厳密には、十二世紀の朱墨の加点資料であるが、ヲコト点に西墓点を用いる。墨の訓点の出自については、

（奥書）點本云墨者敬一大阿闍梨授尊樣也件阿闍梨受良勇和尚耳／

賴尊記_{云々}

とあるもので、良勇（八五四〜九二三）が敬一（八六七〜九四九）に授けたものが、墨点で書かれている。この墨点は、陀羅尼に濃く加点されているが、陀羅尼に加点された墨声点は、「●」ばかりである。陀羅尼には、例外として、ただ一例「尾_(上書)」の加点が存するが、漢文本文には、声点が認められない。

以上が、管見の及んだ平安中期の西墓点資料である。平安中期資料においては、清濁を加点仕分ける資料も存してはいるものの、漢文本文の声点加点には、関心が薄いようで、陀羅尼には、加点例が多い。しかも、陀羅尼において清濁を書き分けた資料があつて、平安中期の訓読者の関心の在処と加点の様態を示しているものと判断される⁽⁹⁾。

も、比叡山上で言語習得が完成したと見ても矛盾はない。

西墓点加点的の寺門派資料、即、三井寺の先入観が強いが、時代によつて、寺門派の主勢力が、比叡山上にあったことを再考せねばなるまいし、山門派との抗争以後、比叡山より下山した僧達が、京都市中、また、その他各所に拠点を構えた事も評価し直さねばならぬ。

高山寺藏不動儀軌永承六年(一〇五二)点本(重文第一部第25号)「資料6」には、二種の加点が存する。初加点が、永承六年の墨点で、仮名、西墓点の加点である。朱点は、天喜二年(一〇五四)の加点と思しく、仮名、西墓点の加点が存する。奥書には、墨朱に対応して、
 (奥書) 一校了

永承六年二月三日隨常林御房 受之了

(朱書)「始自天喜二年八月十六日至十八日奉隨實相房重受」

とある。永承頃の常林房が未勘であるが、天喜頃の「實相房」とは、頼豪の謂いであろう。まず、墨点の漢文本文の声点加点においては、

16、一切の尾[○]囊^上也[○]迦^上、羅利[○]娑^上等(高山寺藏不動儀軌永承六年点)

17、瘞[○]楚^上するコト「瘞楚(らむこと)」遍く[○]支^上

體[○]に入(り)て(高山寺藏不動儀軌永承六年点)

18、孩[○]子^上ノ相貌を作レ。(高山寺藏不動儀軌永承六年点)

等とあつて、清濁を分かつたず、「○」の加点が専らであるが、漢文本

文中の音訳梵語の例に、一例、

19、娑[○]識^上鑿^上ノ如き「如(く)シテ」(高山寺藏不動儀軌永承六年点)

の如く、例外として「○」の加点が認められる。

陀羅尼の加点は、

20、薩[○]目^上契^上藥^上(高山寺藏不動儀軌永承六年点)

の如く、「●」「●」と加点した例が、専らで、中に、例外的に、

21、咤[○]暗^上(高山寺藏不動儀軌永承六年点)

の如く、「○」の使用例が存する。

高山寺藏不動儀軌天喜二年点は、永承六年の墨点との異読の記入とみられ、仮名点も西墓点の加点も、限られたものである。この天喜二年点では、漢文本文に、

喜二年点では、漢文本文に、

22、大暴惡、旋嵐猛風(の)衆(くの)樹^上ノ葉を。飄^上(する)か)如シ(高山寺藏不動儀軌天喜二年点)

23、復(た)能(く)動搖^上(せ)不^上。(高山寺藏不動儀軌天喜二年点)

24、自在(の)羅^上惹^上(と)爲(る)(高山寺藏不動儀軌天喜二年点)

などとあつて、清濁「○」「○」の例が確認されるが、陀羅尼の加

例は拾えない。

高山寺藏金剛頂蓮華部心念誦儀軌(重文第二部第114号)永承六年

同七年奉從鷄足房又受羯磨會了

同年五月奉受三昧會大供養會了(保安四年の奥書以下略)

の如くであつて、金剛界儀軌を、都合三度に分かつて伝授を受けたようである。三度の内、二度までは、同一人、鷄足房(念円)から伝授を受けたことは、奥書より明白であるが、金剛界儀軌も何度かに分かつて伝授が行われる風もあつたとすれば、金剛界儀軌永承六年点の声点の複雑な出現は、かかる伝授の様態と関係したものかも知れない。

東寺観智院藏胎藏界儀軌(第二九函第1号、玄法寺儀軌) 康平二年(一〇五九) 点本「資料8」には、西墓点の加点が存する。資料の詳述を別稿に譲るが、康平二年、延久二年(一〇七〇)の朱点の西墓点が存する。延久二年点は、康平二年点をなぞつたもので、両期点は、基本的には、同一の訓読を加点しているものと考えられるものである。この資料の漢文本文には、以下の声点が現れる。

- 36、迎^キ羅^上奢^送を△臺^上「イ△臺^上」現せり。(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

- 37、嬰^ア黠^イ黠^イとして△玄^五雲^五の猶し。(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

等の例があり、「○」と「△」とで、清濁の区別をしている。一方で、漢文本文には、

- 38、○涅^上哩^上底^上方^上の大日如來の下に依れり。(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

- 39、○金^五翅^上王と并(せて)女とあり。(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

等の例が見えて、濁音を「○」で表示した箇所も並存する。

なお、墨点(平安後期点、仮名点)にも、

- 40、説(き)たまはく 是れ汝か^上勤^五勇^上「勤^五勇^上」の漫

茶羅なりと(東寺観智院藏玄法寺儀軌、「は墨書)

- 41、忿^上迅^上俱^上摩^上羅^上「ハ」、「於」青蓮花に住せり。(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

の例があつて、清音声点に「○」濁音声点に「△」を使用している。

この方式は、漢文本文中の漢語は勿論、漢文本文にある梵語音訳部分にも使用されて区別がない。

陀羅尼では、朱点は、

- 42、唵^上地^上室^上哩^上輪^上多^上尾^上

の如く、清濁を「●」で区別している箇所もあるが、

- 43、難^上徒^上鉢^上難^上娜^上曳^上(東寺観智院藏玄法寺儀軌)

法寺儀軌)

の如く、濁音を「△」表示した箇所も存して揺れが認められる。

平安後期加点の墨点では、

- 44、多^上娜^上曩^上(東寺観智院藏玄法寺儀軌墨点)

の如く、陀羅尼の清濁を「●」で区別している一方で、

- 45、薩^上擔^上野^上(東寺観智院藏玄法寺儀軌墨点)

などであって、陀羅尼においても、清濁を「○」「△」で表示した部分もある。

随心院藏胎藏儀軌卷下（玄法寺儀軌）「資料9」には、以下の奥書が存する。

（奥書）承暦二年（一〇七八）六月廿（以下破損）

西基点の加点資料で、平安後期末の承暦二年と思しき、朱点が存する。この資料の奥書は、途中までのもので、この資料の成立事情が分からないが、その朱点の声点は、漢文本文では、

46、○身_上「於」_下。嚧_上。胎に處せり（随心院藏玄法寺儀軌）

47、金剛。牙_上。菩薩と（随心院藏玄法寺儀軌）

とあって、声点では清濁を区別しない。漢文本文の濁音字には、濁点を付した例があつて、

48、月妃と戰。捺_上。「捺」字左傍中央に「ㄣ」符号あり）羅と

（随心院藏玄法寺儀軌）

49、商羯。羅_上。は戟_上。「戟」字左傍中央に「ㄣ」符号あり）印にせよ。（随心院藏玄法寺儀軌）

などであつて、濁音専用の符号「ㄣ」が認められる一方、例外的に、

50、遮_上。文_上。茶_上。「茶」字左傍中央に「ㄣ」符号あり）眞言（に）曰（く）（随心院藏玄法寺儀軌）

とあって、孤例であるが、濁声点「ㄣ」が認められる。また、

51、「罽_上」字に金剛の光なり。（随心院藏玄法寺儀軌）

漢文本文中の種字を示したもので、これも漢文本文では孤例である

が、「ㄣ」の符号を認める。

陀羅尼では、一般には、

52、怛_上。哩_上。茶_上。地_上。也_上。捨_上。也_上。（随心院藏玄法寺儀軌）

儀軌）

等として、清音声点「●」、濁音声点「ㄣ」を使用するが、

53、罽_上。日囉_上。薩_上。但_上。罽_上。呼_上。（随心院藏玄法寺儀軌）

例外的ではあるが、右の如く「○」符号が現れるし、

54、薩_上。罽_上。達_上。麼_上。徧_上。唎_上。吠_上。達_上。徧_上。（随心院藏玄法寺儀軌）

院藏玄法寺儀軌）

これも例外的に、濁音声点で「ㄣ」が現れる。また、これも例外的であるが、漢文本文と同様に、濁音符「ㄣ」が使われている。

55、○疑_上。「疑」字左傍中央に「ㄣ」符号あり）●哩_上。恨_上。

拏_上（随心院藏玄法寺儀軌）

大方の傾向としては、漢文本文には声点「○」と濁点「ㄣ」が認められ、陀羅尼においては、清音声点「●」と濁音声点「ㄣ」が使用されるが、例外的な表記が入り交じる。天台宗寺門派資料の特徴と思われる濁音声点「△」は出現しない。

この資料で、注目すべきは、「布字八印」の部分で、ここには、他と異なつて、以下の四種の符号が現れる。

56、●左_上。●磋_上。●惹_上。●鄮_上。壤_上。

57、灼_上。●綽_上。●弱_上。●杓_上。●弱_上。

などの例が存する。単点「●」の加点された「左」「灼」字は、広韻

全清字であり、「●」の出現が認められる。双点「●●」は加点が確認される「磋」「綽」字が広韻次清字で、これへの加点に認められる。また、「二」の加点も存しているが、加点された「惹」「壤」「弱」字は、いずれも広韻次濁字である。「二」と認められる加点も存して、「艶」「杓」字は、広韻全濁字である。形態として四種が帰納されると共に、それぞれ、漢字音における頭子音の清濁に対応し、これらを区別した加点となっている。

58、●多●他●娜●馱●曩
の如き例では、「曩」字は、広韻次濁字であるが、「●」の加点がなされ、揺れも認められる。

この期の他の西墓点加點資料には、他に類を見ない事象である。平安後期の末期においても、西墓点資料群の中で、学問水準の高い活発な訓読活動の動態があったものと認められよう。

奥書が無く、年紀が明確ではないが、平安後期加點と推定される資料について、以下に、事象を記述する。

東寺観智院藏蘊悉地儀軌第二平安後期点本（又別第十一函第一号）「資料10」には、二種の訓点があつて、朱点は平安後期と思しき仮名と西墓点の加點、墨点は、平安後期と見られる仮名点の加點が存する。朱点の声点を整理すると以下のようになる。漢文本文には、唯一、

59、天の諸●厨（主厨）「イ●厨（クツヤ）」（観智院藏蘊悉地儀軌第二）
とした、濁声点と疑わしき例が存するのみである。

陀羅尼部分には、

60、唵●跋●折●囉（観智院藏蘊悉地儀軌第二）

の如く、「●」点のみが現れて、声点による清濁の区別を示さない。例外的には、

61、●悉●地馱●喋（替）莎訶（観智院藏蘊悉地儀軌第二）
の如く、孤例であるが、声点「○」が現れる。

この観智院藏蘊悉地儀軌第二平安後期朱点では、基本的には、陀羅尼だけに「●」のみの声点加點が行われていると認められる。なお、同じく平安後期加點と思しき墨点には、声点は現れない。

平安後期の儀軌類の資料では、西墓点に特有とされる濁声点「△」が出現するのは、

○高山寺藏金剛界儀軌永承六年点

○東寺観智院藏玄法寺儀軌康平二年点・延久二年点、同平安後期

仮名点

の二資料だけであつて、管見の及んだ他の五資料には、濁声点「△」の出現が認められない。

検討対象が量的には、十分とは言えないかも知れないが、平安後期の西墓点資料と言っても、加點された声点の体系は、様々で、中に移点資料を含むとしても、多様な声点がいられたいと整理される。こうした様相は、西墓点資料群内において、種々の声点体系の加點が行われていたことを示すもので、平安後期における活動的加點の実態―訓読語の活動―を示すものと考えられよう。

三、平安後期の西墓点加点的経・経釈類資料

平安後期の西墓点加点的経または経疏類の訓点資料については、管見の及んだ所が、多くはない。

東京大学国語研究室には、西墓点加点的大毗盧遮那成佛経義釋卷第二から卷第二十、十九帖「資料11」が所蔵されている。¹¹⁾この資料には、卷第七に、以下の奥書が存する。

（奥書）

「天台僧」

治安四季（一〇二四）四月八日聽了 僧□□本

（別巻）「承久二年（二二二〇）^{壬午}三月十八、於迎輪院傳受如之同四月一、〆、壹卷、傳受了衆七人 空命 弁空 賢雅／靜運

賢實 玄俊」

卷第十一には、

（奥書）長元七年（一〇三四）^{甲戌}十月十九日點了（草名）

の奥書が存している。右の資料には、平安後期（治安七年、長元七年）の朱の西墓点の加点が存して、他に、長治二年（一一〇五）の墨の喜多院点の加点が存する。治安四年の奥書の存する卷第七を取り上げてみると、

62、自然に因業^⑤を撥^⑥除して（卷第七・西墓点）

63、性の空を觀^⑦察する時（卷第七・西墓点）

など、漢文の本文に、音読個所が無いわけではないが、声点の出現は、希で、声点としては、

64、故（に）五乘轍^⑧「^⑨轍^⑩」相ひ融^⑪會せ不^⑫「也」。〔卷第七・西墓点〕

65、哦^⑬字一切諸法一切行不可得（なるか）故トイフ者（卷第七・西墓点）

の如くであって、「〇」が現れるが、清濁を区別しない。漢文本文の声点は、梵語音訳部分に対する加点が厚い。

陀羅尼（偈）における声点の検討を以下に加えるが、卷七には、陀羅尼（偈）が無く、陀羅尼（偈）の存する卷第九の例を掲げる。

卷第九には、梵本の金壽偈を引いて、

66、阿^⑭壤^⑮囊^⑯鉢^⑰吒^⑱口^⑲嚩^⑳嚩^㉑瑤^㉒（卷第九・西墓点）

の如く「●」が加点された箇所が存する。また、明鏡偈を引いた箇所では、

67、澄^㉓輪^㉔馱^㉕阿^㉖囊^㉗尾^㉘羅^㉙阿^㉚藥^㉛（卷第九・西墓点）

とあって、例外的ながら、「〇」も現れる。偈に、一般的に使われている声点「●」も、清濁を区別しないようである。陀羅尼では、焼香真言などの引用があつて、「南麼三漫多勃陀喃」達摩馱賭弩薩木帝「莎訶」などと引用されるが、西墓点の声点は見あたらない。

右の帰納は、資料の一部分だけを取り上げて示したもので、概述の域をでないが、漢文本文には「〇」、引用された偈には、「●」と

あつて、単純な体系しか示さない。

東寺観智院金剛藏には、平安後期加點と思しき蘇悉地羯羅經卷上(又別第二〇函第2号)「資料12」が存する。本文には、朱の西墓點の加點があり、墨點の仮名點が施されている。奥書には、
(奥書)〔別筆二〕「於洛陽城店屋買取了」

使者以内假房取寄者也

慈門記之

(別筆一)「延久二年(一〇七〇)三月十八日 相傳如舜之」

とあつて、相伝奥書が、延久二年であるから、訓點はそれ以前に加點されたものと判断される。本資料の漢文本本文部分には、

68、佛部眞言は扇底。迦の法なり(東寺観智院藏蘇悉地

羯羅經卷上平安後期點)

の如く、漢文本本文中の梵語の漢字表記部分に、「〇」の加點が認められる。また、漢文本本文の漢語には、

69、滯礙。有(る)こと无(く)して(東寺観智院藏蘇悉地

羯羅經卷上平安後期點)

の例があつて、濁音字に声點「〇」の加點があり、右の例においては、濁音表示には右傍「下」が機能しているように解釈される。

70、扇底。迦の法と補瑟微の法と阿毗遮嚧迦の法とは

(東寺観智院藏蘇悉地羯羅經卷上平安後期點)

の如く、梵語の音訳部分では、「●」による加點も存する。陀羅尼部分には、

71、●達摩囉惹●使●抵摩訶●蜜●你

(東寺観智院藏蘇悉地羯羅經卷上平安後期點)

の如くであつて、「●」のみの加點で、声點で清濁を区別しない。陀羅尼における加點率が高いのは、これまで取り上げてきた資料、儀軌類、經・經釈類を通じて同傾向であるが、清濁を区別せず、体系は単純である。

京都大学図書館藏の蘇悉地羯羅經卷上延喜九年點本に加點の平安後期(承暦三年カ)點の記述を行う。同點は、朱點で、「蘇悉地羯羅經分別持誦相品第三」以降に加點されたもので、その朱點においては、多くの声點加點例が存する。声點の加點は、漢文本本文、陀羅尼部分に亘つて存在し、漢文本本文では、

72、身ノ諸ノ。嘲ト一切ノ戯口笑ト(中略)惡口罵詈トヲ調

(ふ)(平安後期點)

73、米粉ハ豆餅ト并ト。蒸畢豆ト及(ひ)油麻餅ト(平安後期點)

などと現れる。「〇」を用いて、清濁の書き分けもないように見えるが、

74、尼連禪河ハ「於」沂。岸ノ處ニシテ諸ノ難無(き)

カ故ニ(平安後期點)

の例がある。「」(胡麻點)の加點例で、濁點の加點例かと疑われる例があるが、孤例であつて正確には帰納できない。

陀羅尼部分にも、声點は現れる。前半部分は、

75、跋^{上通}日●囉^上●拏^上囉^上（平安後期点）
 76、避^上●麼^上●囉^上、●滂^上、●捺^{上通}（平安後期点）
 右の如くで、声点は、「●」と「\」とが使われ、「\」は、濁音表示であると帰納できる。この資料の後半部分、「塗香藥品第八」末尾の「塗香眞言」には、

77、薩^{上通}●囉^{上通}。苾^上。地^上（平安後期点）

の如くあって、これより卷末までは、陀羅尼に「○」が使われる。平安後期点においては、前半部分では、漢文本文と陀羅尼部分とで、声点の形体が異なり、使い分けが認められるが、後半部分になると、漢文部分でも陀羅尼部分でも「○」が使われる（但し、後半部分も陀羅尼の濁点は「\」が現れる）。

五島美術館蔵の妙法蓮華経卷第五（藤南家経）「資料13」は、平安後期の資料と推定されるもので、朱の西墓点加点が存する。本文は、五四三行に互るが、巻第五で、陀羅尼はなく、漢文本文のみである。音合符の使用があつて、字音語が含まれる資料であるが、声点の加点は見あたらない。

取り上げた西墓点加点的経・経釈類の絶対数が多くないが、右に掲げた資料では、声点の加点体系が簡素で、儀軌類に比べて、多様ではないように観察される。特に、一点であるが、頭教関係の妙法蓮華経の西墓点加点資料には、そもそも声点の加点が見あたらない。

四、平安中期・平安後期の西墓点資料の声点の体系

以上、管見の限りでの平安中期・平安後期の西墓点資料に認められる声点の機能、体系を各資料ごとに記述してきたが、これらの結果を纏めて示したものが次の一覧表である。

平安中期資料

資料番号	漢文本文・「音訳梵語」	陀羅尼	加点年代
資料1	(○)	(○)	延喜九年(九〇九)
資料2	○	●●	永延元年(九八七)
資料3	なし	なし	正暦二年(九九二)
資料4	なし	●●	良勇(八五四)・九三三・天永三年(一一二)

平安後期儀軌類資料

資料2	○	○	●●	長保六年(一〇〇四)
資料5	○	○	●●	延久二年(一〇七〇)
資料6	○	○	●●	寛弘五年(一〇〇八)
資料7	○	○	●●	永承六年(一〇五一)
資料8	○	○	●●	天喜二年(一〇五四)
資料9	○	○	●●	永承六年(一〇五一)
資料10	○	○	●●	延喜九年(九〇九)
資料11	○	○	●●	正暦二年(九九二)
資料12	○	○	●●	良勇(八五四)・九三三・天永三年(一一二)

資料9	○ (○) L (濁点) [((○))]	● (○) L (濁点) ● (○) L (濁点) ● (○) L (濁点) ● (○) L (濁点)	承暦二年 (二〇七八)
資料10	●● (存疑)	● (○)	平安後期

平安後期経・経積類資料

資料11	(○)	● (○)	治安四年 (二〇二四)
資料12	○ [○●]	●	延久二年 (二〇七〇) 以前
資料1	○ (●) 、 (存疑)	● ○ \	承暦三年 (二〇七九)
資料13	なし	該当部分なし	平安後期

注、「」は、漢文本文中の梵語音訳漢字に付された声点を示す。() は、用例の希少なものに付した。

右の表に纏められた各資料群毎の声点体系を、抽象化して纏めれば以下のようになる。

- 1、平安中期の西墓点資料の声点は、永延元年加點の金剛界儀軌 (大東急記念文庫蔵・資料2) において、陀羅尼の加點に清濁を分かつが、他の資料の声点体系は、比較的簡素である。一等資料ではないが、資料2よりも更に遡ると思われる、石山寺蔵金剛界儀軌で、奥書に良勇の尊様を伝えたとある資料4では、陀羅尼の加點のみで、基本的には、「●」の加點が行われて、簡素である。

- 2、平安後期の資料は、儀軌類、経積類に互って、漢文本文には、清音に「○」を、陀羅尼には、清音に「●」を使用することが共

通的である。但し、この期の西墓点資料には、同様の符合を用いても清濁を区別しない資料も含まれる。

- 3、平安後期西墓点資料の儀軌類、経積類資料での濁点の表示は、各資料毎に、多彩、多様で共通点を帰納し、抽象化して示すことが困難である。即ち、この事は、訓読語の活発な動態を示すものと解釈されよう。

- 4、平安後期の儀軌類資料では、体系、様式は多様であるが、漢文本文、陀羅尼部分ともに、清濁を (中国漢字音における頭子音の清濁をも) 区別して示そうとしている。

- 5、平安後期の経積類資料では、取り上げることが出来た資料数が多くないが、儀軌類資料に比較して、声点の体系が簡素で、平安中期の資料の傾向に近い加點態度であると判断される資料を含んでいる。

以上のように記述されようが、これらの纏めからは、平安後期の西墓点資料における訓読語が、儀軌類、経積類と資料によって加點態度が異なっているように認められる。また、特に、儀軌類においては、訓読語が活動的で、諸種の訓読の試みが行われ、決して、固定では無かったものと評価される。

おわりに

以上、平安中期と平安後期の西墓点加點資料における声点の加點体系を資料ごとに整理して記述してきた。管見の及んだ平安中期の

資料が十分ではないが、平安後期資料における声点加点の体系は、資料によって区々で、平安後期西墓点資料において、その多様性を示していることが注目される。

平安後期の西墓点資料にも、移点資料が存して、前代の言語事象を反映していることも想定できるが、そうした資料があったとしても、淘汰されることがなく、多様の形態が並存した状況を記述できるところに注目せねばなるまい。

稿者は、金剛界儀軌を取り上げて、平安時代後半期の西墓点資料における訓読語が、平安中期から、平安後期にかけて存在した、天台宗寺門派における複数の訓読が淘汰されて、慶祚に始まる訓読を基として、部分的に改変されながら平安後半期に伝えられたのではないかと推測したことがある¹³⁾。通時的に、西墓点における声点の加点体系について考えようとすれば、本稿に加えて、院政期の西墓点資料を問題にする必要があると考える。院政期の詳細は、別稿に譲ることとするが、別稿においては、院政期の西墓点資料の三井寺に關係する資料群では、漢文本文に「○」「△」、陀羅尼には「●」「●」の表記体系が基本で、諸種の符合も観察され、訓読語の重合があったろうこと。「△」声点が現れない資料は、天台宗山門派が関した資料か余宗の關係した資料であるかと結論づけた。

平安後期においては、声点の加点の体系的整理から、訓読語の多様な道筋が存して、活発な訓読活動（伝授活動）が行われてそれが、次第に淘汰されていった状況があるように思われる。

西墓点資料に特有だと指摘される「△」声点も、右に整理された如く、平安中・後期資料全体に目配りしたとき、圧倒的に出現するというわけでは無いようである。

血脈類などを観察すると、円珍流の寺門派の教団の規模は、天台宗も円仁の流である山門派に比較し、小さかったのではないかと考えられる節がある。小さな教団であれば、それだけ緊密な体制が組み立てられていたはずであると仮定され、訓読語において多様な言語活動が行われ難い、統制の利いた条件下にあると考えられる。また、比叡山より下山した後、三井寺は、独自の戒壇をもてなかつた。特に、十二世紀には、その辺りの危機感が増していたようで、組織の引き締めも行われていたであろう。

しかし、実際には、以上に検討した如く、山門派との抗争後の十一世紀・平安後期の声点は多様性を示す。即ち、平安後期という時代は、寺門派教団の宗教あるいは学問活動が活発であったと認められる。これを支えたものは、寺門派僧個々人の個性、即ち、言語習得期の多様性、あるいは、寺門派の学問的拠点が、未だ洛中、洛外に盛んで、こうした情況が、訓読語上にも発現されていた時期であると考えることが許されるかも知れない。

注

1、築島裕「大日経疏の古訓点について」(『五味智英先生古稀記念 上代文学論叢(論集上代文学第八冊)』昭和五十二年十一月)。

- 同「成唯識論の古訓法について」(『国語と国文学』第四十六巻第十号、昭和四十四年十月)。
- 2、三保忠夫「蘇悉地羯羅經古点の訓読法」(『国語学』第一〇二集、昭和五十年九月)。
- 3、月本雅幸「大唐西域記の古訓法について」(『国語と国文学』第五十七巻第十二号、昭和五十五年十二月)。
- 4、拙著『平安鎌倉時代漢文訓読語史料論』(平成十九年二月、汲古書院)第六章第四節。
- 5、注4拙著、第四章第二節。
- 6、築島裕「濁点の起源」(『東京大学教養部人文科学科紀要』第32輯、昭和三十九年四月)。
- 同「古点本の片仮名の濁音表記について」(『国語研究』33、昭和四十七年三月)。
- 沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』(平成九年十二月、汲古書院)第三章。
- 佐々木勇「声点「△」の機能―『辨正論』保安四年点について―」(『かがみ』第三十一号、平成六年三月)。
- 7、拙稿「院政期の天台宗寺門派西墓点資料における声点―「△」声点の発祥と伝流―」(『表現技術研究』第五号、平成二十一年三月)。
- 8、本資料については、先学の御高論がある。
- 築島裕「大東急記念文庫蔵金剛界儀軌古点について」(『かがみ』第拾壹号、昭和四十一年三月)に詳述されているが、注4拙著、第六章第一節においても、論述したところである。
- 9、築島裕、注6文献において、声点の加点が、天台宗において陀羅尼に始まったと説かれる。
- 10、拙稿「訓点資料における訓読語複層性の一様相―東寺観智院蔵大毗盧遮那広大成就儀軌の場合―」(『広島大学文学研究科論集』第六十八巻、平成二十年十二月)。
- 11、月本雅幸氏御高配の写真資料による。該当資料の精査の機会を持っていないのが現状で、概述の域をでない。本文に掲げた用例も、極一部分の調査結果でしかない。巻七と巻九の一部について触れただけである。東京大学国語研究室の許しを得て、精査の機会を得たいと考えている。
- 築島裕『平安時代訓点本論考 研究篇』(平成八年五月、汲古書院)五四四頁。
- 12、注4拙著、第六章第一節。
- 13、注7文献。
- 〔付記〕
- 本稿に触れた各資料については、御尊蔵各寺院、文庫の関係者各位のご芳情を忝なくした。また、資料閲覧提供について月本雅幸氏には、特段のご厚情を賜った。また、佐々木勇氏からは、本稿に関しての貴重な御教示を得た。記して、御礼を申し上げる。

Active Movement of Japanese Reading Language in Material of the Nishihakaten “西墓点” of Tendaishu-Jimonha “天台宗寺門派”

—Special Reference to Shoten “声点” of Material
at Middle and Later Term of the Heian Era—

MATSUMOTO Mitsutaka

The feature in Shoten “声点” used by Tendaishu-Jimonha “天台宗寺門派” at the Heian era was to have used Δ . Δ was what Kyoso “慶祚 (955~1020)” of Mii-dera Temple invented it in around 1000 in the Christian era. Only Δ was used for the material of the 12th century.

In Material of the Nishihakaten “西墓点” of Tendaishu-Jimonha “天台宗寺門派” in the middle of the Heian era, Δ was not used.

After 1000 in the Christian era, the system of Shoten “声点” including the apprentice of Kyoso “慶祚” is many kinds and various. Before Kyoso “慶祚” invents Δ , the apprentice shows that his linguistic system had been acquired. Moreover, Japanese reading language unfixation, it is shown that there was an active change.